

## 平成26年度活動報告書(1/1)

学部・委員会名 東京農業大学「食と農」の博物館

学部長・委員長等氏名 博物館長 上原万里子

担当所管 博物館事務室

テーマ 農大の「今までを」「今を」「これからを」発信する

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

## 1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）

平成26年度は博物館の開館10周年の節目となる。博物館では10年間の展示を通じた教育普及(社会への情報発信)活動の集大成として、農大の過去(原点)と現在・未来を見据えた企画展示を計画している。農大の原点である建学の精神「人物を畑に還す」に立ち戻り、日本古来の農を中心とした世界観を見つめた展示「農と祈り 一田の馬、神の馬」を3月28日から9月15日まで、尖鋭な進歩の先にある科学を探る「バイオミメティクスを超えて! 一昆虫などの生き物や自然に学ぶものづくり」を10月1日から翌年3月15日まで開催予定。またこれをきっかけに、私立大学附属の博物館として更なる充実を期して行きたい。

## 2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）

10周年記念展示(第1弾)「農と祈り 一田の馬、神の馬」(3月28日から9月15日)の計画に伴って、例えば「展示案内」の作成にしても当博物館の従来の考え方を捨て、図録としての性格を持たせた、より博物館的な資料の作成を始め、今まで以上に挑戦的な展示企画としたい。また、ひとつの企画展示につきいくらまでという予算配分ではなく、展示や資料の蒐集・保管・管理に使うその博物館予算である、という方向性(当然予算の限度もあるが)で臨んでみたい。展示に伴う記念出版にしても内容的にも相応しいものとする。

3月28日には企画展示のオープニングにあわせて10周年の記念セレモニーも企画。今まで発行してきた展示案内の総集編を10周年記念誌として作成。これは今後の博物館の進むべき方向性の指針にもなり得る。

また、学術・情報課程の全面的協力のもと、上記の展示のオープンにあわせて2階常設展示室に日本の古民家の復元模型を計画。学芸員課程履修者の実習も更に充実される予定。

## 3. 達成度を判断するための指標

博物館活動の達成度を判断する指標はやはり社会的な反響ではないかと思う。入場者数、メディアが取り上げる頻度や博物館イベント等への応募者数などであろうか。ただ、博物館としては自信のある展示発表であっても社会的な反響が今ひとつ、というケースは他の博物館や美術館または映画作品などにもよく見られる現象である。よってそれだけでは判断して欲しくはないが、ひとつの指標であることは確かではある。

また企画展示については、企画に関連する課程や学科または研究室などの学生も多く携わる場合もあるので、彼らの展示活動に対する達成感なども抽象的ではあるものの、指標のひとつになり得るのではないだろうか。

## 4. 成果・評価

## ■成果

ふたつの開館10周年記念展示は概ね成功といつて良いように思う。ただ指標の一つである入館者数(添付の「平成27年度入館者数」のグラフを参照)が全体的に減少しているが、これは進化研が、平成26年度からバイオリウムのショップを閉店したのと同時に正面入口(馬事公苑側入口)の常時オープンを中止したことが大きくかかわっている。1月31日現在、バイオリウムの入館者数は昨年度比で約-46%の減のところ、博物館は約-18%減に留まっている。入館者数の算出は添付の「平成27年度入館者数」を参照のこと。これらにより平成26年度は一定の成果が得られたと思われる。

【添付資料】①平成27年度入館者数、②平成27年度取材申し込み・掲載紙、③展示案内N0.67、N0.68、④開館10周年記念誌 ⑤記念出版「農と祈り 一埜を超えた12の対談集」

## ■評価(5~1で記載してください)

4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた。

## 5. 課題及び改善事項

平成26年度の方向性は間違っていないと思われるので、平成27年度も引き続き同じ「基本方針」と「活動テーマ」について忠実に活動していきたい。

## 6. 平成27年度への継続の有無

有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。